

## 「情報化の将来」

学習院大学計算機センター所長 轡 田 收

インターネットというカタカナ語を見かけない日はない。新聞であれ雑誌であれ、記事や広告にあふれている。それもこれさえあればなんでも叶う魔法であるかのようである。しかし、これほど頻繁にあらわれている言葉ではあるが、知る人ぞ知る、というのが現状であって知らない人々との差は歴然としている。「二つの文化」、人文科学的文化と自然科学的文化ということが久しく論じられてきたが、そのいずれにも分類しがたい新たな文化が出現してきたと言わざるをえない。

インターネットの普及度は目覚ましく、まさしく光と影の両面をともなって、日毎にその網の目を広げ密にしている。

学習院でも、「学習院ネットワーク」が完成しつつあり、明年度には目白、戸山、四谷の3地区はすべてネットに収まる。そして幼稚園児から学童、生徒、学生、大学院生そして教職員と、院内に生活する者全員が「利用者」となりうる。

これはただ単に光ケーブルを引き回し、T T N e t（東京通信ネットワーク）やI S D N（N T Tの総合サービスデジタル網）だとかでの接続をするということの意味するのではない。「利用」というのは、たしかに在るものの良い点を生かして使うことではあるが、なにをどのように使うかが、学習と研究の場ではもっとも重要な課題となる。すでにあるもの、与えられているものを引き出すだけが利用ではないのである。

WWWの画面をサーフして、あるいは探索して、知識をえたり買い物をしたりすることなら、だれでも2時間も教われればできてしまう。問題はコンピュータを用いインターネットにのって、なにを創造するかにある。つまり利用はtakeにだけあるのではなく、それを通じてなにをgiveする／できるかにかかっている。日々の学習や研究から生み出される良質の知的資源を、広く社会や学界に向けて発信し、それをもとに文字通りコミュニケーションを行ってこそ、教育の場のネットワークは目的を達することができる。

幼稚園児から、ということは、ただ早くコンピュータ教育をしようということではない。幼児期にして始めて可能な創造力もあるからである。一貫制教育の中でどのような才能が伸びてくるか、将来が楽しみである。そのためには、まず学習院スタイルの情報処理教育のプログラムを整備することが当面の課題となる。

そして来年度からは、教職員対象の情報処理教育も制度化される予定である。ゆくゆくは「情報革命」も推進されるであろうし、WWWの学習院ホームページは、学校ないし教科、あるいは

学科ごとの知的宝庫の入口の様相を示すのではないかと思うと、楽しみは大きい。その一方で、計算機センターはソフトやハードの開発やメンテナンス、さらにはセキュリティの面でも重荷を負っている。しかし、これまでの蓄積を資産として、必ず役に立てるものと信じている。またそのためにも、院内全部門からの知的支援を期待すること切である。